

ベンハミンさんにとってスポーツとは…

人間性を高めるもの

「礼儀を正すこと、仲間を大切にすること、時間を守ること、感謝の気持ちを持つこと」。これらは、私たちが練習を始める前と終わりの後、欠かさず繰り返している道場訓練の一部です。空手を始めた当初は、練習に遅れてもあまり気にせず、仲間とのあいさつなどもおろそかになっていた気がします。でも今は、青年海外協力隊・橋本憲治さん(25歳・山口県)の指導のもと、「精神を鍛え、人間性を高めることを怠ってはならない」という空手の考え方に触れ、私自身、多くを学んでいます。つらく厳しい練習を毎日こなすだけの忍

耐力もつきました。橋本先生からは、ただ受け身で練習するのではなく、「なぜこの練習が必要なのか」「この技を身に付けるには何が必要なのか」といったことを常に考え、主体的に練習に取り組むよう、繰り返し言われています。今は、指示を待たなくても各自が自発的に練習しようとする姿勢が全体に広がっています。一番うれいのは、国内外の大会などでそうした努力が実り、好成績を収めた瞬間。仲間の中から中米地域の国際大会でメダルを取った人が現れるほど、技術レベルも上がっています。



スポーツから学んだこと

世界各地で、JICAボランティアとともにスポーツや運動の魅力を実感している人々がいる。彼らはそこから何を感じ取っているのだろうか。

マイマさんにとってスポーツとは…

健康な体づくり

今、エアロビクスにすっかり夢中になっています。初めは「大変だろう」と不安だったのですが、インストラクターである青年海外協力隊・野村奈々さん(30歳・愛媛県)の「体を動かすことは楽しいですよ!」という言葉にやる気もあがり、日々前向きに取り組んでいます。実はトンガは、世界的に見ても肥満者の割合がとても高い国。生活習慣病にかかる人も急増しているそうです。だから、楽しく運動しながら丈夫で健康な体をつくって、エアロビクスは、トンガ人の健康管理にはとても効果的だと思っています。最近

は周りの人にも「一緒にやろう」と声を掛けています。一人だと大変なことも、仲間同士でいつも支え合えば、きっと続きますから。「朝起きるとききが高くなってきた」、「体重が減った」と、喜ぶ友人たちもいます。それでもなお私たちの国では、学校の体育の授業すらあまり普及していないのが現状です。ナガが私たちに教えてくれているように、運動はやらせながらも、健康のために自ら前向きに楽しみながら取り組むもの。こうした活動が、トンガで少しでも多く広がってほしい、そう願っています。



クウォンさんにとってスポーツとは…

信頼関係を築くもの

サッカーの審判員に必要なものは、選手が全力でプレーできるような試合をコントロールし、かつ彼らの安全に配慮しながら競技を円滑に進めるための高いマネジメント能力です。しかしカンボジアでは、反則にとくにただ目を吹いているだけで、試合全体を見渡せる審判員は少なく、選手や観客も勝敗だけに注目がちです。選手と審判員、または選手同士がお互いを尊重し合う雰囲気もありません。私はフェアプレーの精神を身に付け、状況を少しでも改善したいと考え、今、日本のリーグなどで豊富な経験を

持つ元審判員のシア海外ボランティア・唐木田徹さん(52歳・北海道)から、国際レベルの審判員としての知識・技術、求められる姿勢、考え方を学んでいます。「カラダ」が自らの行動で示してくれた、「時間を守る」、「グラウンドは常にきれいにする」、「一試合ごとに反省し、次に生かす」といった紳士的な態度や真摯な取り組みを、審判である私たちが率先すること。これらの積み重ねが、選手からの信頼感へとつながり、結果的にスポーツマンシップにのっとった良い試合を作り出すのだと感じています。



ジョードさんにとってスポーツとは…

社会性を養うもの

発達遅滞やダウン症、自閉症などの障がいがある子どもたちが通う学校で、体育を教えています。理学療法士の青年海外協力隊・森由陸さん(29歳・奈良県)が定期的に学校を訪れ、ストレッチや筋力トレーニング、バランストレーニングといった、障がいのための運動やリハビリテーションの方法を指導してくれています。体育の授業の目的は、体力の向上や障がいの悪化を防ぐことだけではありません。私が森さんと行っているのは、レクリエーションやおもちゃを取り入れることで、子どもたちが楽しみながら学べる授業。

この取り組みを通じて彼らは、自分の意思で物事を決める力、問題を解決する力、コミュニケーション能力など、彼らが社会に溶け込むために必要な多くの力を養っています。さらにこうした力は自信にもつながります。最近では積極的に授業に取り組む子どもも増えてきました。保護者の授業参観も実施し、子どもたちの障がいや発達についての理解を深めてもらう機会もついています。これらを通して体育を通じて子どもたちの成長を促し、家庭や地域とともに彼らの積極的な社会参加を実現させていきたいと思っています。

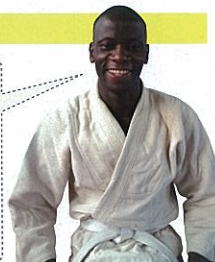


ファビアンさんにとってスポーツとは…

世の中に役立つための術

警察学校の指導教官をしている私が、現職の日本の警察官でもある青年海外協力隊・北條吉伸さん(42歳・岩手県)から教わっているのは、護身術や逮捕術としても有効な実践的な柔道。特に関節技といった犯人逮捕などに役立つ技を身に付けられるのは、これまで適切な逮捕術を学ぶ機会がなかった私にマラウイ警察にとって、大変有意義です。でも、ただ技を覚えるだけでなく、「術を通して心身を整える」という日本武道の神髄を学んでいるといえます。先生や練習相手に対する感謝の気持ち

を表す「礼」の心。そして道やモノを大事に使うことの大切さ。こうしたものを私は柔道を通して知りました。練習場は、誰もいっつも無言な道場ですが、「使え前よりよくなりました」を言葉に、指古の後は必ず掃除をしています。「鍛えたい方を行いのために使い、世の中に役立つ人にならなければなりません」。北條先生がくくりにする柔道の理念です。教習して私が警察官を指導するときは、必ずこの精神を伝えていきたい。それは、社会の平和を守る私たちが警察官としてならない、とても大事なことだからです。





水泳イベントに参加した子どもたちと田中さん(左端)と萩原さん(右端)
©WORLD SWIM AGAINST MALARIA

【ワールド・スイム・アゲinst・マラリア】

www.worldswimagainstmalaria.com/

「泳ぐことで救える命がある」—マラリアに苦しむ人々を救うことを目的とした、国際的チャリティ水泳イベント。日本では、井本直歩子さん、岩崎寿子さん、柴田聖衣さん、田中雅美さん、中村真衣さん、萩原智子さん、源純真さん、森隆弘さん、山本貴司さんなどの五輪スィマーが中心となり、国内の水泳大会などで募金活動を行っている。集まった募金はすべて、マラリア予防のための蚊帳を購入する資金に充てられる。2010年6月25日には、世界中で一斉に「ワールド・スイム・アゲinst・マラリア2010」が開催される予定。



スタジアムでエチオピアコーヒを販売するフー太郎の森基金のスタッフ
©フー太郎の森基金

【ベガルタ仙台のコーチをエチオピアに】

NPO法人フー太郎の森基金 × ベガルタ仙台

NPO法人フー太郎の森基金と今シーズンリーグのJ1に復帰を果たしたベガルタ仙台の共同企画。サッカーを通じた国際貢献として、2011年1月にベガルタ仙台のコーチをエチオピアに派遣しサッカー教室を実施する。派遣費用はサポーターからの募金と、スタジアムで販売されるエチオピア産のコーヒーや雑穀の収益で賄われる。「サッカーをしなくてもできないエチオピアの子どもたちにも参加することで、指導する姿勢にも変化が起きてほしい」(ベガルタ仙台)。募金方法についての問い合わせは、フー太郎の森基金事務局(TEL:0244-38-7820)まで。

【スマイル アフリカ プロジェクト】

www.sotokoto.net/smileafrica/

月刊「ソトコ」と高橋尚子さん(シドニー五輪女子マラソン金メダリスト)が協働で行うプロジェクト。日本国内でサイズの合わなくなった運動靴を回収し、貸して靴が買えないケニアの子どもたちに贈っている。集まった運動靴は、JICAの青年海外協力隊などを通じて、現地の子どもたちに直接届けられている。また年1回、首都ナイロビで「ソトコ サマリマラソン」を開催。高橋さんも参加し、マラソンを通じて現地の人々と交流している。(第2回ソトコ サマリマラソン)は2010年5月23日。運動靴の回収方法についてはHPを参照。

ケニアの子どもたちと交流する高橋さんとダグラス・ワキウキさん
©スマイル アフリカ プロジェクト/鈴木健



タンザニアの難民キャンプの子どもからタスキを受け取る高橋さん
©EKIDEN for Peace 2010

【EKIDEN for Peace】

「難民に選んだスポーツは何か」。この問い掛けに答えるべく、潮吉利彦さん(元五輪男子マラソン代表)が舵を取り、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)と国連難民高等事務官事務所(UNHCR)がタンザニアの難民キャンプで駅伝を企画。「タスキをつなぎながら走ることで、スポーツの楽しさ、仲間とともに一つのことに取り組みる意義なども体感してもらうのが目的。また、日本国内でもチャリティマラソンを開催し、アフリカと日本がつながっていくことの意義を若者たちに伝えたい。今年2月にはルンジシ国境近くの難民キャンプで第2回目を開催。有森裕子さんも参加した。

アンコールワット国際ハーフマラソンで、車椅子の男性を助しながら走る有森さん
©ハート・オブ・ゴールド



設立10周年記念誌「共に走るハート・オブ・ゴールド10年の歩み」を発行



【NPO法人ハート・オブ・ゴールド】

www.hofg.org/

有森裕子さんとリハセロハ五輪女子マラソン銀メダリスト、アラタタ五輪女子マラソン銅メダリストが代表を務める国際協力NPO。主にカンボジアを活動拠点とし、アンコールワット国際ハーフマラソンの運営協力をはじめ、カンボジア人の手によって国づくりができるよう、人材育成の分野に

力を注いでいる。また現在、JICA章の模倣複製協力事業(パートナー型)「小学校体育科教育振興プロジェクト」を通じて、カンボジアの小学校で体育科教育の本格的実施に向けて取り組む。日本にも国際協力教育の担当者や教員、学校機関などで研修を実施している。

特報
スポーツの力
—一人の力や育ちを一つの国へ—

スポーツで国際協力してみよう!

スポーツと国際協力。

一見、かけ離れたものであるようだが、

実は世界の人々を幸せにできる身近なアプローチの一つだ。

ここでは、スポーツに携わる人々が行う国際協力を紹介。スポーツ好きなあなたも、自分なりの参加方法が見つかるかもしれない。



JICAオフィシャルサポーターとして、世界各国を訪問している北澤さんと伊達さん

【JICAオフィシャルサポーター】

JICAオフィシャルサポーターを務めるのは、サッカー解説者の北澤豪さんとプロテニスプレーヤーのクムル伊達公子さん。スポーツの最新情報で活躍する二人だ。定期的に開発途上国を訪問してJICA事業の視察などを行い、日本国内で途上国の現状を伝えている。また訪問時、北澤さんはサッカーを、伊達さんはテニスを通じて、現地の子どもたちと交流を図っている。(裏表紙に関連記事)



プロスポーツチームもスポーツ用具を寄付

【JICA「世界の笑顔のために」プログラム】

JICAが年2回実施する物品寄付プログラム。途上国で必要とされている「モノ」を日本国内で募集し、JICAが派遣中のボランティアを通じて世界各地へ届ける。募藏品目にはスポーツ用具も多く、これまでにガンバ大阪、柏レイソル、湘南ベルマーレ、大宮アゼルティヤ、日本プロバスケットボールリーグなども、シーズン中に使用したボールやユニフォームなどを寄付。今年度の募集の詳細は29ページを参照。

【認定NPO法人柔道教育ソリダリティー】

www.npo-jks.jp/

「世界の子どもたちが皆、平等に柔道ができるように」と、リサイクル柔道着の寄贈、指導者の派遣、外国人選手や指導者の受け入れなどを行っているNGO。理事長は山下泰裕さん(ロサンゼルス五輪男子柔道無差別級金メダリスト、現東海大学教授)。

活動地は、中国、ロシア、イラン、ラオス、南アフリカ共和国など幅広い。今年3月には、山下さんが建設途中からかわった「日中友好南京武道館」が日本の無償資金協力により完成。開館記念として、山下さんが地元学生に柔道の稽古を行った。

海外の子どもたちに熱心にも指導する山下さん。役後退後は、海外でも柔道の普及に努めている
©柔道教育ソリダリティー

